

博多とアジアの映画(96)

松浦 仁

嘉禾電影有限公司(ゴールデン・ハーベスト)が製作したブルース・リー人気のあやかり映画ともいえる「ブルース・リー死亡の塔」(1980)は、1981(昭和56)年に福岡市では以下の映画館で公開された。

ピカデリー1 6.13 ～ 6.26 (「暴力教室」との2本立て)

福岡グランド 6.13 ～ 7.10 (「暴力教室」との2本立て)

東映パラス 7.11 ～ 7.11 (「暴力教室」との2本立て)

東映パラス 7.18 ～ 8.7 (「魔界転生」との2本立て)

(前号を参照)

さらに、「ブルース・リー死亡の塔」は正月興行前の12月5日から12月18日まで福岡東映で「帰って来たドラゴン」「その後の仁義なき戦い」この3本立てで上映された。

「帰って来たドラゴン」(原題は「神龍小虎闖江湖 Call Me Dragon」)は、ブルース・リーの「燃えよドラゴン」と同じ年の1973(昭和48)年に製作された香港映画だった。製作は、後に「スネーキーモンキー 蛇拳」(1978)「ドラゴンモンキー 酔拳」(1978)を製作してジャッキー・チェンを世界的スターに押し上げた思遠影業公司(シスナル・フィルム)だった。

密輸、麻薬、暴力がはびこる悪の魔窟、ゴールド・サンド・シティを支配する悪らつなボスが所有する、時価二百万ドルの真珠玉(シルバー・パール)を奪うためゴールデン・ドラゴンがやって来た。ボスは、ドラゴン以上のカンフーの使い手、ブラック・ジャガーを雇い、ドラゴンとジャガー、そしてカンフーの使い手でシルバー・パールを狙う謎の美女、ミアオとの三つ巴の壮絶な戦いがはじまる。「帰って来たドラゴン」は、ブルース・リーのカンフー映画と同じ時代に製作され、ジャッキー・チェンのコミカルな要素を取り入れたカンフー・アクション映画の先駆けとなる映画だった。

主演のゴールデン・ドラゴンを演じたブルース・リャン(梁小龍)は、ブルース・リー(李小龍)と名前はよく似ているが、柳の下の泥鰌をねらって製作された香港や台湾のカンフー映画の二番煎じな俳優ではなく、「生龍活虎小英雄」(1972、邦題は「必殺ドラゴン鉄の爪」)などブルース・リーよりも早くカンフー映画に主演していて、迫力満点のアクションは唯一ブルース・リーに対抗できる俳優と評価されていた。そして、準主役のブラック・ジャガーを演じたのは日本人俳優の倉田保昭だった。倉田保昭は、1971(昭和46)年

に東京で開催された香港大手の映画製作会社、邵氏兄弟有限公司(シヨウ・ブラザース)のオーディションに合格し香港を拠点にして香港映画に出演していた。たいいてい悪役だった。

「帰って来たドラゴン」は1974(昭和49)年に日本でも公開され、倉田保昭は(和製ドラゴンと呼ばれて人気俳優になった。ほどなく凱旋帰国した倉田保昭は、日本のテレビドラマや映画に多数出演した。

なお、女ドラゴンの謎の美女を演じたのは、香港で放送された日本や欧米のテレビアニメやドラマの声優として活躍していたウォン・ワンシー(黄韻詩)で「帰って来たドラゴン」がデビュー作だった。

「帰って来たドラゴン」は、富士映画が配給して1974(昭和49)年3月から全国公開されているので、1981(昭和56)年12月に福岡東映で再映されたのは、初公開から7年ぶりのことだった。

一方、「ブルース・リー死亡の塔」ともうひとつの併映だった「その後の仁義なき戦い」は、1979(昭和54)年に東映が製作した日本映画だった。戦後、広島で起こったヤクザの抗争を題材にした飯干晃一によるノンフィクション小説を題材に、深作欣二が監督して19

73(昭和48)年から1974(昭和49)年までに製作・公開された5部作「仁義なき戦い」と1974(昭和49)年から1976(昭和51)年までに製作・公開された3部作「新仁義なき戦い」から少し間をおいた1979(昭和54)年に製作・公開され、深作欣二監督の「仁義なき戦い」シリーズとは関連のない番外編的な作品だった。監督は60年代から東映のチャンバラ映画や任侠映画を数多く手がけた工藤栄一に代わり、主演は根津甚八だった。大阪の大暴力団・石黒組の若頭の地位を巡り、傘下の浅倉組と花村組の対立が深まる、暴力組織の内部抗争という設定の中で、翻弄される若者たちに焦点をあて、友情と裏切りの人間模様を激烈に描いていた。

1981(昭和56)年に福岡東映で公開された「ブルース・リー 死亡の塔」は、「帰って来たドラゴン」にその後の仁義なき戦いの3本立てで上映されたのだが、これら3本の映画にはブルース・リーファンの期待感を煽る共通するものがあって、福岡東映の秀逸な意図を感じ取る事ができる。

「ブルース・リー 死亡の塔」はブルース・リーと銘打ったタイトルではあったが、主演は「死亡遊戯」でブルース・リーのタミー俳優だった韓国出身のタン・ロン(唐龍)だった。ブルース・リーは、

「燃えよドラゴン」で未使用になったフィルムを使った3分しか登場せず、代役でつないだものの前半の30分で殺されて消えてしまふ。ブルース・リー本人のアクションシーンもなかった。これでは、ブルース・リーの新作映画を切望してやまない観客は納得できないだろう。

そこで、福岡東映はこれまで併映していた「暴力教室」や「魔界転生」からあえて旧作の「帰って来たドラゴン」とその後の「仁義なき戦い」を併映して3本立てで上映したのだった。「ブルース・リー 死亡の塔」の原題は「死亡之塔」で、ブルース・リーの名は入っていないのだが、日本ではあえてブルース・リーの名を入れてあたかもブルース・リー主演の映画のようにした。そして、観客を納得させるために併映作品として選んだのが「帰って来たドラゴン」とその後の「仁義なき戦い」だった。

ブルース・リーは、1973(昭和48)年12月に日本で公開された「燃えよドラゴン」(1973、原題は「龍争虎闘

Enter the Dragon)で、カンフー・アクション映画のヒーロー、日本ではドラゴン(龍)Dragon、地球上で最強の伝説の生き物となる。以後「燃えよドラゴン」



ン」(1973)「ドラゴンへの道」(1972)「ドラゴン危機一発」(1971)「ドラゴン怒りの鉄拳」(1972)と日本では邦題にドラゴンをいれて順次公

開された。

ドラゴンと言えばブルース・リーだが、「帰って来たドラゴン」では帰って来たのはブルース・リーではないのだが、アメリカや日本で公開されてブルース・リーがスーパースターとなる最初の作品「燃えよドラゴン」と同じ年の1973(昭和48)年に製作された、ブルース・リー主演ではないがブルース・リーを想起させる映画だった。

そして、1974(昭和49)年に「神龍小虎闖江湖 Call Me Dragon」というタイトルの香港カンフー映画が「帰って来たドラゴン」という邦題にして3月に日本で公開されて、準主役だった日本人俳優、倉田保昭が和製ドラゴンとして日本に凱旋帰国した。倉田保昭は、「帰って来たドラゴン」の日本公開からわずか3カ月後の7月から東京12チャンネルで放送された連続テレビドラマ「闘え!ドラゴン」(12月まで全26回)で初主演した。たしかに、帰って来たドラゴンとは別の俳優(主演のブルース・リー)によって蘇ったブルース・リーのことであり、香港カンフー映画界から日本に帰って来たドラゴンである、日本のブルース・リーともいわれた倉田保昭のこともあった。次号へ続く
＝ 図版は、「帰って来たドラゴン」の倉田保昭 ＝